カトリックジャパン ダイジェスト 11
2026
カトリック新聞

教皇、フランス訪問「世を生かすため」

（ヨハネ６・５１）



9月26日、教皇レオ14世はフランスのルルドで、聖母マリアが出現したマサビエルの洞窟を訪れ、静寂の中、ひざまずき、群集と共に祈った（OSV）



9月26日、野外ミサを行うためパリ中心部のコンコルド広場に向かってシャンゼリゼ通りを進む途中、複数の障害がある10歳の少女、マリーガランス・ノエルさんを祝福する教皇レオ14世（OSV）

国　際

- 教皇、フランス訪問
  パリでのミサ、ノートルダム大聖堂、ルルド訪問など ２・３面
- その他の国際記事 ４面

国　内

- 特別臨時司教総会 ５面
- 関東大震災後の朝鮮人虐殺検証へ　初の日韓議員懇談会 ５面
- 谷大二 さいたま教区名誉司教　逝去 ６面
- その他の国内記事 ６面
- 映画『ヒンド・ラジャブの声』 ６面
- ２０２３～２６年叙階の司祭・助祭・終身助祭 ④ ６・７面
- 教皇レオ１４世初の回勅 「人間の偉大さ」要約　第4回 ８面
- 主日の福音解説 ９・１０・１１面
- 短歌・俳句 １１面
- 訃報・告知板・番組・きょうをささげる１１月の祈り １２面

オンラインで日々ニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」のダイジェスト紙、月刊「カトリックジャパンダイジェスト」をお届け致します。本紙は無料です。

カトリックジャパン ニュース

カトリックジャパンダイジェスト 第19号
発行＝カトリック中央協議会広報部
〒135-8585 東京都江東区潮見2－10－10 日本カトリック会館
電話（03）5632－4435　FAX（03）5632－7030

教皇フランス訪問

教皇、フランス訪問　力強く「いのちの権利」を擁護

教皇レオ１４世は９月２５日から２８日までフランスを訪問し、行く先々で、いのちの権利を力強く擁護した。今回の訪問のテーマは、「世を生かすため」（ヨハネ６・５１）。

フランスでは今年７月、特定の条件を満たせば安楽死と自殺ほう助を可能とする「死への援助」が合法となった。教皇は訪仏初日、エマニュエル・マクロン大統領をはじめとする政府関係者らへのスピーチで、「無条件にいのちを受け入れる必要性」を強調した。

また教皇はパリのユネスコ本部で開かれたＡＩに関する会議に出席し、技術進歩と人間の尊厳の関係について警告。パリ中心部でミサをささげ、８０万人以上の参加者に、心の渇きについて話した。

教皇は２０１９年に焼け落ちたノートルダム大聖堂でもミサをささげ、信者たちに、神の愛の力を証しする「生きた石」となるよう呼びかけ、その後、若者との集いにも臨んだ。同国では近年１０代から成人にかけての洗礼志願者数が記録的に増加している。

ルルドの洞窟を訪れた教皇は泉の水を飲み、静寂の中で祈った。ルルド巡礼所内にある医療施設では、患者たちに対して「皆さんは決して社会の重荷ではありません」とはっきり語り、また性虐待被害者７人と非公式に面会の時を持った。

「幸福と平和の源 イエス」
パリで野外ミサに80万人


9月26日、教皇の野外ミサが行われるのを前に、シャンゼリゼ通りを埋めつくした人々（OSV）

【パリ９月２６日ＯＳＶ】８０万人近くの人々が９月２６日、教皇レオ１４世が司式するミサに参列するため、パリのシャンゼリゼ通りに沿って凱旋門からコンコルド広場までを埋め尽くした。教皇はこの日のミサでフランスの人々に、真の幸福と平和の源であるイエスに倣うよう招いた。

「イエスの刺し貫かれたみ心という源泉から、水を飲みましょう。そうです、皆さんは神に、いのちに、真理に、一致に、平和に、交わりに、幸福に渇いているのです」

教皇がパパモービレ(教皇専用車)に乗ってコンコルド広場に現れると、人々は旗を振り、喜びにあふれて聖歌を歌い歓迎した。

この日の祭壇奉仕者のうちの６人はダウン症患者だった。「人類遺伝学の欧州ジャーナル」に発表された２０２０年の研究によると、フランスではダウン症の出生前診断の結果、６８％が中絶を選択している。パリにおいてこの６人の奉仕者は、強力ないのちの証し人となった。

教皇は集まった人々に、自分の心の中を見つめ、こう問いかけるよう促した。「私の最も深い渇きは何か？」「私たちはその渇きを癒やすためにどこから水をくむだろうか？」

「その答えはイエス・キリストです」


9月26日、パリのコンコルド広場で野外ミサを司式するために、ステージへ向かう教皇レオ14世（OSV）

さらに教皇は続ける。「仕事をやりきった後や、努力が実を結んだ後、あの内的空虚感は以前よりも強くなって、しばしば再び現れます。そうなるとその空虚感を埋めようと、私たちは新たな楽しみを探したり、もっと物を所有したいと考えたり、できる限りのことをして空虚感に気付かないように振る舞ったりします」

そのようなときこそ、「私たちを幸福と平和の源泉に導いて」くれるのはイエス・キリストだ、と教皇は強調する。

「イエスは私たち一人一人を名前までご存じです。私たちに関することで、主がご存じないことはありません。私たちの秘密であれ、意図であれ、弱さであれです。主は私たちの心の底までご存じなのです」

最後に教皇は、「イエス・キリストへの信仰をあなた自身だけにとどめないでください。それを外にあふれさせましょう。そうして、あなたが出会う人々が元気を取り戻し、その人たちの渇きが癒やされますように」と祈った。

このミサはパリでの２日間の滞在中、最大の行事となった。

記事全文

教皇、ユネスコ本部でスピーチ
「技術を人間の尊厳に奉仕させる」

【パリ９月２５日ＯＳＶ】教皇は９月２５日、パリにある国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）本部で開かれたＡＩに関する現代の課題に関する会議でスピーチした。教皇は、現代の課題の中には新技術との対峙があり、その技術を、人類に奉仕し続けるものとしなければならないと主張。胎児や戦地に生きる子どもたち、障害のある人、高齢者、移住者と難民、そして「最も弱い立場に置かれた人と貧しい人」にこそ、思いやりが示されなければならないと強調した。


9月25日、ユネスコ本部で話す教皇（OSV）

記事全文

教皇、修復されたノートルダム大聖堂へ
神の愛を証しする教会の「生きた石」に

【パリ９月２５日ＯＳＶ】パリにあるノートルダム大聖堂が２０１９年の大火災で焼け落ちていくのを世界が目にして以降初めて、教皇はこの大聖堂内に入った。そしてフランスの信者に、神の愛はいかにして人類を回復させ、癒やすのかを証しする、教会の「生きた石」となるよう求めた。「この大聖堂は生まれ変わりました。ですから皆さんも、大聖堂と共に、聖性と日々の使命に向けた新たな弾みを得て、生まれ変わりましょう」


9月25日、パリのノートルダム大聖堂で信者たちに語りかける教皇レオ14世（OSV）

記事全文

教皇フランス訪問

教皇、ルルドの洞窟を訪問
病気の人、苦しむ人のため祈る

【ルルド（フランス）９月２６日ＯＳＶ】ルルドのマリア聖堂の中で、教皇レオ１４世は病気の人や苦しんでいる人のために祈り、聖母マリアが１８５８年に聖ベルナデッタに現れた洞窟の癒やしの泉の水を飲んだ。

ルルドは、マリアの出現以来、癒やしと奇跡の場所として知られている。ルルドに関連した７０００件以上の癒やしの実例が１８５８年以降、正式に記録されている。そのうちの７２件が、ルルド医薬局によって正式に奇跡として認められた。

日が沈む頃、就任後初めてルルドの洞窟を訪問した教皇は、聖歌「アヴェ・マリア」に迎えられ、巡礼者たちに手を振った。

濃密な祈りの時の中で、教皇は聖母像の前でひざまずき、洞窟内は静寂に包まれた。

教皇は立ち上がると、洞窟の岩壁に触れるために立ち止まり、奇跡の泉からくまれた水が入ったグラスを受け取った。

それから教皇は、フランス語でおとめマリアに祈りをささげた。

「私たちは信頼をもってあなたに頼ります。なぜなら、あなたはイエスが与えてくださった母であり、私たちが必要としていること全てに心を配ってくださるからです」


9月26日、フランス・ルルドの、聖母が出現したマサビエルの洞窟でひざまずく教皇（OSV）

教皇は特に平和のために祈り、病気の人、世話をする人、貧しい人、恵まれない人のために祈った。澄み渡った秋の夜空に輝く満月の下、教皇は人々を先導してラテン語で「主の祈り」を歌い、祝福を送った。

記事全文

教皇、ルルドの医療施設を訪問
「死への援助法」に強く反対示す


9月27日、ルルドで、病気や障害のある人々とあいさつを交わす教皇（OSV）

【ルルド（フランス）９月２７日ＯＳＶ】車椅子と松葉づえ姿の人の中、ルルドに集まった約１５万人の巡礼者の祈りの意向を受け、教皇は９月２７日、病気の人に対する安楽死と自殺ほう助を可能にする「死への援助法」の実施と障害のある胎児の中絶に強く反対を表した。

「親愛なる、病気に苦しむ兄弟姉妹の皆さん、皆さんは決して社会の重荷ではないと言いたいのです」と教皇は、ルルド巡礼所内にある医療施設の患者と介護者との面会の席で語りかけた。「皆さんは、私たち人類の脈打つ心臓であり、教会のための大切な宝です」

「研究室のアルゴリズム（計算手順）に基づいて、特定の胎児や高齢者のいのちの生死を決定する権利は誰にもありません」「医学は計画的な死を施してはなりません」

教皇の力強い言葉は、このルルドの医療施設の患者とスタッフから熱烈な反応を受け、拍手はしばらく鳴りやまなかった。

「（ここルルドでは）皆さんの松葉づえ、車椅子、隠れて流した涙は、障害と見られることはありません。むしろそれ故にこそ皆さんが完全に尊重され、受け入れられる場であり、人生を変えてしまうほど計り知れない神の愛と出会える場でもあるのです」「皆さんは真に、教会の中心におられます」と教皇は力を込めた。

記事全文

性虐待被害者、記者会見に応じる
教皇と私的謁見後、５人が実名で

【ルルド（フランス）９月２８日ＯＳＶ】ルルドで教皇と面会した、聖職者による性虐待を受けたフランス人被害者たちは、教皇の深い個人的共感と、性虐待が教会内を腐敗させるのを許した組織的問題を率直に認めた教皇の姿に感銘を受けたと語った。

９月２７日に教皇と謁見した７人の被害者のうち５人は、彼らが許可した取材陣の記者会見に参加し、教皇との謁見は良い意味で期待を裏切るものだったと答えた。

教皇庁は、教皇が男性４人、女性３人の被害者と個別に面会し、その後全員で集まったと発表した。

寄宿舎学校に通っていた子ども時代に性虐待を受けたジャンマリー・デルボさん（８０）は、教皇との謁見時の感情に圧倒されたと語った。「教皇は私の状態をご覧になり、両腕で抱きしめてくれました。特別な瞬間でした」と振り返った。

デルボさんは性虐待を受けた後、長くカトリック教会から離れていた。しかし今回、教皇が「皆さんを祝福します」と言った時、自然に十字架のしるしを行っていた。「私のような筋金入りの無神論者にさえ、教皇は６５年ぶりに十字を切らせたのです」


9月27日、教皇との謁見後、記者会見に臨んだ、聖職者によって性虐待を受けた被害者たち（OSV）

デルボさんは、性虐待の痛みは、一生続くだろうが、「教会とはどのようなもので、この教皇はどのような人物なのか」について新たな見方ができたと認めた。

もう一人、十代の頃に教区司祭から性虐待を受けたジェローム・ギユマンさんは、現在、カトリック学校と協力しながら被害者の会を率いている。ギユマンさんは、性虐待加害者は個人だが、虐待の場を提供し、虐待を許してきた教会の組織内の構造にも問題があるとの見解を、教皇は明確に持っていたと語った。「その見解は、特に私に力強く刺さりました。というのも教皇が繰り返し話されているように、この組織的な問題がどれほどまん延しているのかを強調されていたからです」。記者から、教皇が性虐待は組織的問題だと正式に認めたのかと問われ、ギユマンさんは「もちろんです」と答えた。

記事全文

国　際

「聖フランシスコ年」の同聖人記念日
没後８００年をミサと行列で祝う

【ローマ１０月５日ＯＳＶ】１０月４日午前０時、聖フランシスコの没後８００年を告げる教会の鐘が、丘陵上にあるイタリアの町アッシジに響き渡った。

今年１月１０日から始まった特別聖年「聖フランシスコ年」の中で、「アッシジの小さく貧しい人」の記念日を１０月４日に迎え、祝賀ムードは最高潮に達した。聖フランシスコ年の始まりには、聖フランシスコの遺骨を崇敬できるよう初めて一般に公開もされていた。



10月4日、イタリアのアッシジで、聖フランシスコの没後800年を記念し、聖フランシスコ大聖堂の下部聖堂で夕の祈りを司式するアクロッカ大司教の到着後、行列を開始する聖職者たち（OSV）

記念の祝祭は１０月３日夜の行列で始まった。行列の後、聖フランシスコが永遠のいのちへ移行したことを記念する、フランシスコ会の伝統的な祈祷（きとう）会である「帰天祭」が、アッシジのサンタ・マリア・デリ・アンジェリ聖堂で行われた。この聖堂には、聖フランシスコが１２２６年１０月３日夜に亡くなった礼拝所がある。

約３０００人が、この敬愛されている聖人を記念しようと３日夜の行列に参加し、聖歌を歌い、祈りを唱えた。行列は、１２２６年に聖フランシスコのひつぎが運ばれた道をたどり、サンタ・マリア・デリ・アンジェリ聖堂から、現在聖フランシスコが埋葬されている聖フランシスコ聖堂まで約３キロを歩いた。

行列は、４日の午前０時のミサに合流した。この深夜のミサは、アッシジの聖堂の教皇特使を務めるアンヘル・フェルナンデス・アルティメ枢機卿が司式した。

アルティメ枢機卿は、聖フランシスコの「帰天祭」の意味を振り返り、会衆に「より良く生きることは、日々、自分自身に死ぬことを学ぶことを意味します。こうして私たちは、一層完全にキリストに倣うことができるようになるのです」と語りかけた。

「所有する物、自分の功績、自分自身に抱くイメージ」などは、最終的に大事なものではない、と枢機卿は述べ、「愛は存在し続け、キリストも存在し続けます。聖フランシスコは貧しい姿で亡くなりましたが、決してなくなることのない唯一の財産を豊かに抱いて亡くなりました。その財産とは主です」と説明した。

１０月４日朝、イタリアの司教協議会会長のマッテオ・マリア・ズッピ枢機卿は、イタリアのセルジョ・マッタレッラ大統領を含む多くの人が参加したミサを司式した。

ズッピ枢機卿は説教の中で、聖フランシスコは私たちに、「暴力と憎しみと誤解のあるところにはどこでも」、平和というたまものをもたらし、平和を築く者となるよう教え続けていると語った。

この特別聖年は、アッシジの聖フランシスコの没後８００年を祝って教皇レオ１４世が公布し、来年の２０２７年１月１０日に幕を下ろす。

記事全文

女性は平和を構築するリーダーに　バチカン、国連会議で

【ニューヨーク９月４日ＯＳＶ】国際社会が分断し、紛争が増加する中、女性が「リーダーシップを発揮し」、「平和をつくり出し、いのちを守る者」となれなければならないとバチカンは９月２日、「平和の文化に関する宣言と行動計画の実施における国連ハイレベルフォーラム」の期間中、声明を発表した。このフォーラムは２０１２年から毎年開催されており、ニューヨークの国連本部で開かれた。目的は、世界に平和と非暴力を広めるという１９９９年に採択された国連総会の決議を促進すること。

記事全文

米国司教団トランプ政権に書簡　ハイチへの大量強制送還に抗議

【ワシントン９月１０日ＯＳＶ】ハイチへの「一時保護資格」（ＴＰＳ）が打ち切られた数週間後、米国司教協議会会長のポール・Ｓ・コークリー大司教は、米トランプ政権にハイチへの大量強制送還を停止するよう求めた。大司教は９月８日付でトランプ大統領に書簡を送り、訴えた。「現在行っているハイチへの大量強制送還を停止することによって、罪のない人々のいのちをさらに危険にさらすことをやめてください。特にハイチではいのちを保障する受け入れ体制などの適切な制度が整っていないのです」

記事全文

英国議会、安楽死合法化を否決　教会「終末期ケアを受けやすく」

【リバプール（英国）９月１４日ＯＳＶ】イングランドとウェールズのカトリック教会は９月１１日、安楽死の合法化が否決されたことを歓迎した。同日、両地域の司教協議会で、いのちに関わる問題を扱う部門の責任司教は声明でこう述べた。「思いやりのある社会の真の基準は、困難な状況にある人々を支えたいという思いであり、いのちを終わらせるよう背中を押すことではありません」

記事全文

メキシコ　グアダルペの聖母大聖堂　献堂50年記念し、特別聖年

【メキシコ市９月１５日ＯＳＶ】メキシコ・シティ教区は９月９日、教皇レオ１４世が、グアダルペの聖母大聖堂の献堂から５０年を記念して特別聖年を宣言する、と声明の中で発表した（１０月１２日開幕）。建て替えられる前の大聖堂は１６９５年に建てられ、おとめマリアの姿が奇跡的に現れた、聖ディエゴのティルマ（マント）が展示された主要な巡礼所となってきた。しかし聖堂は１９２１年に爆撃により損傷し、時と共に老朽化が激しくなったこともあり、現在の聖母大聖堂が建設されることになった。

記事全文

教皇の一般謁見講話　人類という一つの共同体に

【バチカン９月１６日ＣＮＳ】教皇レオ１４世は９月１６日、バチカンのサンピエトロ広場で開かれた一般謁見で、技術にますます依存し、分裂が進む世界において、人類は自分たちを一つの「人間の共同体」と考えるよう緊急に迫られていると強調した。

「人間の完全性と社会の発展は、緊密に関わり合っていると考えなければなりません。その二つを敵対させたり、切り離したりすることは、それらを無意味なものにしてしまう恐れがあるからです」

記事全文

教皇、子どもたちとロザリオ　「光の神秘」で平和を願う

【バチカン１０月１日ＯＳＶ】教皇レオ１４世は１０月１日、バチカン庭園にあるルルドの洞窟で、何百人もの子どもたちとその家族と共にロザリオの祈りを唱えた。教皇はカトリック信者に、１０月を通して、世界平和のためロザリオを唱えるよう求めていた。「世界中の１００万人の子どもたちが、私たちと共に祈ってくれています」と教皇は子どもたちに語りかけた。

記事全文

国　内

2026年度特別臨時司教総会
「被造物を大切にするためのミサ」来年から９月第１の主日ミサに

日本カトリック司教協議会（会長＝菊地功枢機卿／東京教区）は、今年度の特別臨時司教総会を９月３０日と１０月１日に東京・江東区の潮見教会で開き、「被造物を大切にするためのミサ」実施に関して審議した。総会には１５人の司教と２人の補佐司教が参加した。


潮見教会で開かれた特別臨時司教総会

今回の総会で審議された「被造物を大切にするためのミサ」は、９月１日から１０月４日までの「すべてのいのちを守るための月間」にささげることが勧められている。この「月間」は、前教皇フランシスコが訪日した際のメッセージを受けて日本のカトリック教会が定めたものだが、もともと教派を超えたキリスト者が世界的に祝う「被造物の季節」の期間に当たる。

総会ではこのミサの実施に関して、下記の３点が審議、承認された。

①日本の教会においては、２０２７年から９月第１主日（被造物を大切にする世界祈願日）に主日のミサとしてささげるいずれのミサも（前日土曜日の夕刻のミサも含めて）、年間主日のミサではなく「被造物を大切にするためのミサ」としてささげる。

②本司教総会に提案された「被造物を大切にするためのミサ」の聖書朗読箇所を使用する。（具体的な朗読箇所などは、今後、カトリック中央協議会のウェブサイトで公表される）

③２０２５年８月に常任司教委員会で認可され公表されている「被造物を大切にするためのミサ」の公式祈願の日本語訳を、教皇庁典礼秘跡省による認証を受けるために同省に送付する。

記事全文

関東大震災後の朝鮮人虐殺検証へ　初の日韓議員懇談会
金性済（キム ソン ジェ）牧師に聞く

関東大震災後に発生した朝鮮人虐殺を検証していくための初の日韓議員懇談会が、８月３１日、東京・千代田区の参議院議員会館で開催された。日本政府が「虐殺の事実を証明する資料がない」として虐殺の真相究明を拒み続ける中、韓国で昨年末、真相究明と名誉回復のための「特別法」が成立したことを契機に実現した懇談会。韓国議員と日本の有志議員が事件に関する認識を共有し、今後の連携を確認した。

懇談会の開催を発案したのは、在日韓国人２世で、「日韓和解と平和プラットフォーム」書記の金性済（キムソンジェ）牧師（７３／在日大韓基督教会引退牧師、日本キリスト教協議会元総幹事）＝**写真**。日本と朝鮮半島の歴史の“はざま”に生まれ、その苦悩の中、「十字架と復活の福音に救われた」という金牧師に、この懇談会の歴史的な意義について聞いた。

神が用いてくださった「在日の私」

議員懇談会開催の背景には、この１年余りの間に起きた日韓両国での画期的な動きがある。まず韓国の国会で、虐殺の真相究明と犠牲者の名誉回復のための特別法の法案がすでに上程されていた２０２５年２月、日本で「関東大震災 朝鮮人虐殺を検証する有志議員の会」（以下・有志議員の会）が発足。さらに韓国で同年１２月、前掲の特別法「関東大震災朝鮮人犠牲事件の真相究明及び犠牲者名誉回復に関する特別法」（以下・特別法）が成立した。

今回の日韓議員懇談会では、特別法の立法化に取り組んできた韓国の議員団と、日本の有志議員が関東大震災後の朝鮮人虐殺事件についての認識を共有した。両国でそれぞれ資料の収集、保存および調査研究を進めるとともに、保有する情報を共有し、犠牲者の実態解明、名簿の整備および名誉回復に向けて協力していくことを確認した。

１９２３年９月１日の関東大震災発生後、「朝鮮人が井戸に毒を入れた」「放火した」などの流言蜚語（ひご）と偏見によって朝鮮人が虐殺された。凶行に及んだのは、戒厳令によって出動した軍や警察のほか、一般市民だ。鳶口（とびぐち）、鉄砲、刀、おの、鎌、竹やりなどで、多くの朝鮮人を惨殺した。

大韓民国臨時政府（当時）の機関紙『独立新聞』（１９２３年１２月５日）の集計によれば、犠牲者数は６６６１人。殺されたのは犯罪者などではなく、罪のない、善良な人々だった。しかし日本政府はこの虐殺について、「政府内にその事実関係を把握することのできる記録が見当たらない」との答弁を繰り返し、真相究明のための調査は手つかずのままだ。

金牧師は後日インタビューで、自身が司会も務めた懇談会をこう振り返った。

「日本の参政権もない在日韓国人の私が、日本と韓国の議員の間に立っていた。神がいま本当に必要だと思われるところで、この私を用いられた……その喜びを覚えて、あの日は奉仕していたのです」

在日として神に用いられる喜びとは、一体どのような喜びだったのだろうか。

「人間の守り」から福音の道へ

金牧師は１９５２年、在日韓国人１世の父親と、在日韓国人２世の母親の間に、大阪で生まれた。父親を５歳で亡くし、育った環境は「日本語の世界」だった。

在日韓国人としてのアイデンティティーの問題に目覚めたのは大学生の頃。在日韓国人２世の朴鐘碩（パクチョンソク）さんが、７１年に起こした就職差別裁判を知ったことがきっかけだ。



韓国人であることを理由に内定を取り消された朴さんは、国籍差別だとして企業側を提訴し、勝訴。この裁判は、在日の人や、後の国籍・民族差別撤廃運動に大きな影響を与えたことで知られる。

金青年は以後、学生運動に打ち込み、在日同胞のために牧師になることを決意。ところが留学先の韓国で、韓国人から“外国人”として侮辱され、在日は日本に同化し、“消えてなくなる存在”だとも告げられた。日本にも韓国にもよりどころのない在日の苦悩を経験し、福音すらも見失う。

だがその渦中、祈りのうちに得たのが、全く新しい福音理解だった。それは自身が在日としてのアイデンティティーを守ろうとしたような「人間の守り」は、福音の道ではないということ。神が在日という存在を必要とされれば、在日は「消えたと思えるところ」から、いつでも新しく呼び集められるという、神のご計画への信頼だ。

今回の懇談会の構想も祈り、考える中で与えられ、実現した。

記事全文

国　内

さいたま教区 谷大二 名誉司教 逝去

さいたま教区の谷大二名誉司教は、かねて療養中だったところ、１０月１０日、さいたま市内の病院で逝去した。７３歳。１９５３年兵庫県生まれ。８６年司祭叙階。同年に浦和助任、８７年上尾主任。９２年に教区事務局長。９３年川口主任（以上、埼玉）、９７年館林主任（群馬）。２０００年に司教叙階。司教協議会の難民移住移動者委員会、部落差別に関する委員会、正義と平和協議会などで要職を務めた。２０１１年、東日本大震災が発生すると、さいたま教区サポートセンターを立ち上げ、被災地を支援。１３年に退任した後は、那覇教区で平和や人権に関する活動、黙想指導などに携わった。著書に『移住者と共に生きる教会』『聖書と依存症』などがある。


谷大二名誉司教

キリシタンゆかりの長崎で開催　日本カトリック神学会学術大会

日本の神学研究者らが集う「日本カトリック神学会」（理事長・竹田文彦〈清泉女子大学教授〉、以下・神学会）は９月７日と８日、長崎純心大学（長崎市）を中心に第３８回学術大会を開催した。総合テーマは「キリシタン時代の神学」。神学会会員のみでの研究発表のほか、大会前日の６日から８日にかけて同学会主催の公開講演会も開かれ、長崎の信仰やキリシタンについて、さまざまな角度からの考察が紹介された。講演会には３日間を通じ、信徒ら延べ４５０人が来場した。記事全文

『ラウダート・シ』の精神を生きる　シンポジウムと聖フランシスコ特別聖年記念ミサ

今年はアッシジの聖フランシスコ没後８００年。その記念日であり、「すべてのいのちを守る月間」を締めくくる１０月４日の前日に当たる１０月３日、「インテグラル（総合的な）・エコロジー」を考えるためのシンポジウムが岡山教会（岡山市）で開かれた。会場とオンライン合わせて１００人余りが参加し、広島教区内での環境を守るための三つの実践発表に耳を傾けた。シンポジウム後、アッシジの聖フランシスコ特別聖年記念ミサもささげられた。記事全文

熊本・八代教会「みんなのカフェ」　地元の人がつながる場に

今夏の熊本地震で被災した八代教会（熊本県八代市）では９月１３日に信徒会館で主日ミサが行われ、教会敷地内でのミサが再開した。信徒たちは翌１４日、地元の人たちが気軽に立ち寄り、くつろぐことのできる場所として、教会敷地内の芝生の庭で「みんなのカフェ」（無料）をオープンした。１０月５日に開かれた２回目のカフェには、八代教会の司祭・信徒ら１２人のほか、熊本地区内外から信徒や司祭ら総勢２０人がスタッフとして参加。スタッフたちは人通りが多い教会の前に立って道行く人たちに声を掛け、１時間ほどの間に約４０人を迎えた。記事全文

「貧しい人のための世界祈願日」教皇メッセージ

年間第３３主日（今年は１１月１５日）は「貧しい人のための世界祈願日」。教皇レオ１４世がこの日に向けて６月に発表したメッセージのタイトルは「主は貧しい人の避けどころとなってくださる」（詩編１４・６参照）。教皇はその中で、貧しい人が増加している現代の状況を見つめる。不正義を批判し、主自身がその人々の「避けどころ」となってくださること、また「わたしたちも、キリストのうちに貧しい者となり、貧しい人の避けどころとなるように招かれて」いると呼びかける。**メッセージ全文はこちら→**

文　化

● 映 画 ●『ヒンド・ラジャブの声』
世界が黙殺した、一人の少女の叫びを聞く

２０２４年１月２９日、イスラエルからの攻撃が激化していたパレスチナ・ガザで、市民７人が乗る乗用車がイスラエル軍に銃撃された。車中で一人生き延びた６歳の少女ヒンド・ラジャブ・ハマダ。映画は、ヒンドと人道支援組織「パレスチナ赤新月社」のオペレーターらとの間で交わされた実際の音声記録を作品の要としてそのままに伝える。上映時間８９分。新宿武蔵野館（東京）ほか全国順次公開。記事全文


©MIME FILMS — TANIT FILMS

2023～26年叙階の司祭・助祭・終身助祭　④

2023年から26年までの間に叙階された司祭・助祭・終身助祭を、数回に分けて紹介する。①洗礼名・名前②叙階時の年齢③叙階年月日④叙階場所⑤現在の活動⑥受階者のメッセージ

◆ 司 祭

【イエズス会】

①アシジのフランシスコ　森晃太郎（こうたろう）②３７歳③２０２３年９月２３日④麹町（聖イグナチオ）教会（東京・千代田区）⑤イエズス会召命担当⑥「人の気持ちが分かる司祭になってほしい」。イエズス会入会前に父から言われたこの言葉がずっと心の奥深いところで脈打っています。そのような司祭に自分がなれているのか分かりませんが、１人でも「共に歩んでくれている」と実感してくださっている方がいるのであれば、感謝しかないです。神様による叙階の恵みを自分のものにすることなく、人々にその恵みが少しでも届くよう日々、奉仕できたらと願っています。



①洗礼者ヨハネ　渡辺徹郎（てつろう）②３６歳③２０２３年９月２３日④麹町（聖イグナチオ）教会（東京・千代田区）⑤六甲教会助任（神戸市）⑥司祭として私が目指すことは人々の魂を救うことです。そのために何ができるかを考えながら日々活動しています。六甲教会では世代や国籍にとらわれない司牧をしたいと思っています。マジョリティーである７０代以降の人々のみでなく、マイノリティーである青少年やミドル世代の人々に対するアプローチも大切にしています。また、日本語コミュニティーと外国籍信徒の交わり促進も心がけています。



①ドミニク　グエン・ヴァン・テー②４３歳③２０２３年１２月２日④主の公現教会（ベトナム）⑤現在、東京の麹町（聖イグナチオ）教会（東京・千代田区）を中心に司牧活動に携わっています。主な活動として、ミサの司式、ゆるしの秘跡の奉仕、霊的同伴、子どもや青年の信仰養成、求道者・受洗志願者のためのカテキズム、結婚講座などを担当していま

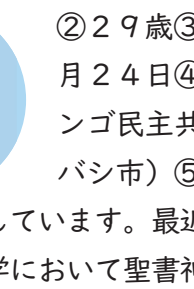


す。また、日本社会の中で孤独やさまざまな困難を抱えて生活するベトナム人移住者が、教会を「自分の家」と感じ、神との交わりを深め、共同体とのつながりを育むことができるよう努めています。⑥司祭として私が大切にしているのは、人の声に耳を傾けることです。現代社会には、孤独や不安、心の傷を抱えて生きている人が少なくありません。そのような人々が、自分は神に愛されている存在であることに気付き、希望を見いだせるよう、キリストのいつくしみを伝える者でありたいと願っています。一つ一つの出会いを神からの恵みとして受け止め、一人一人と共に歩み、共に祈りながら、神の愛を証しする司祭であり続けたいと思います。

①ムカディ・イルンガ・クリスチャン②３４歳③２０２４年８月２４日④聖霊教会（コンゴ民主共和国・ルブンバシ市）⑤２０２６年１０月から英国のオックスフォード大学で倫理と政治哲学・神学の研究⑥司祭職というのは、奉仕のために存在するものであると思います。神の民の牧者として仕えるために召されたと深く信じております。この尊いお招きは恵みであるので、それを少しも無駄にしてはならないと心に留めております。従って、勉学と司牧を通して、全ての人々、特に弱い立場に置かれている人々や排除されている人々に寄り添い、神の慈しみと憐(あわ)れみを示したいと思います。神の慈しみによって、これからも日本におけるカトリック教会、また日本社会のために奉仕してまいりたいと思います。



①クロディエン・バガヤムクエ・チュバカ②２９歳③２０２４年８月２４日④聖霊教会（コンゴ民主共和国・ルブンバシ市）⑤現在、リヨン教区に所属しています。最近、リヨン・カトリック大学において聖書神学(新約聖書)の修士課程を修了し、現在は同大学にて哲学修士課程の２年目を続けています。司祭としての活動では、個人的霊的同伴を行いながら、人々の信仰生活の歩みを支えています。またリヨンのイエズス会共同体の聖堂においてミサを司式し、複数の小教区でゆるしの秘跡の奉仕を担当しています。さらに、キリスト者の起業家および企業経営者のグループの同伴も行っており、福音と職業的責任、召命と社会的使命との統合を支援しています。学問的研究と司牧活動の両面を通して、人々への奉仕を深めることを心がけています。⑥司祭として、いつも人々と共に歩み、福音の喜びを分かち合う者でありたいと願っています。特に、一人一人の人生の歩みと神の働きに耳を傾け、祈りと対話を通して、その人が神とのより深い交わりへ導かれるよう努めています。また、聖書研究と司牧の経験を結びながら、現代社会の中で希望と和解のしるしとなる教会に奉仕していきたいと考えています。



①パウロ　山内豊②３９歳③２０２４年９月１４日④麹町(聖イグナチオ)教会(東京・千代田区）⑤現在、上智大学大学院心理学専攻にて勉学。麹町教会でのミサなど。⑥いつもさまざまな人のお世話になっております。司祭として「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神はご自分を愛する者たちに準備された」(一コリント２・９－１０）を意識して宣教するように心がけています。人間の常識を越えた、福音の尋常のなさを伝えていきたいです。

①パウロ・ガン（ベトナム殉教者）　グエン・タン・アン②３４歳③２０２５年９月２７日④麹町（聖イグナチオ）教会（東京・千代田区）⑤神学の修士課程に在学中⑥皆さん、私は２０２５年９月２７日に司祭叙階されました。これから司祭として人々に福音の喜びを伝えたいと思います。特に、教会や社会の中で皆さんと共に歩み、お互いを大切にし、全ての命に奉仕することで、愛に満ちた神の顔を示すことを目指しています。この使命を忠実に全うするためには、皆さまのお祈りが必要です。どうかこれからもお祈りいただけますよう、よろしくお願い致します。感謝を込めて。



①ニティン・リズボン・コエリョ②３５歳③２０２６年９月１２日④麹町（聖イグナチオ）教会（東京・千代田区）⑤現在は上智大学大学院で神学の修士課程の学びに励みつつ、週末は高円寺教会や麹町教会（ともに東京）で土曜・日曜のミサの司式や奉仕をお手伝いさせていただいております。今後は司牧の学びを深めながら、都合がつく際にはゆるしの秘跡の奉仕にも積極的に携わっていく予定です。学業と教会共同体での司牧活動を両立させながら、日々恵みのうちに歩んでいます。⑥叙階式の日に共同体の安藤勇神父様からいただいた「司祭職に卒業はない」という言葉を、今も深く心に刻んでいます。司祭としての歩みは生涯をかけた学びであり、人々の喜びや痛みに寄り添い続ける道だと感じています。日々のミサや秘跡、出会いを通して神のいつくしみを分かち合えるよう努めてまいります。まだまだ未熟な私ですが、皆様と共に祈り、生涯をかけて成長していければ幸いです。どうぞ温かくお導きください。



◆助祭

【淳心会】

①アウグスティーニョ アレフ・セザール②３２歳③２０２６年３月２０日④倉敷教会（岡山県倉敷市）⑤倉敷教会、水島教会、玉島教会の三つの教会で活動しています。病者の訪問、子どもたちへの教理教育、結婚を控えたカップルへの結婚準備、そして日々のミサの補助などを担当しています。それ以外にも、所属する修道会のさまざまな活動にも参加しています。⑥私は幼い頃から、自分の人生の中に神様からの召命を感じてきました。心の奥深くにある、とても強い呼びかけです。その思いは、私を教会と神の民へと近づけ続けています。変化が激しく、多くの困難に満ちた現代社会において、イエス・キリストの模範、教え、そしてその存在から与えられる希望は、これまで以上に必要とされていると感じています。私は以前から、この世界で誰かの役に立ちたい、何か特別なことを成し遂げたい、そして人々や自分自身の人生をより良いものにしたいと願ってきました。（祖国）ブラジルで出会い、共に活動した最初の宣教師たちの生き方と模範に深く感銘を受け、宣教師司祭として生きることこそ、自分が歩むべき道であると確信するようになりました。これまで主は、この生涯にわたる奉仕の歩みの中で、私を導き、励まし、守り続けてくださいました。これからも主が私を導き、照らしてくださり、日本、そして派遣されるあらゆる場所で、人々のために仕える聖なる良い宣教師司祭となることができますよう、心から祈っています。

◆終身助祭

【名古屋教区】



①ヨハネ・マリア・ヴィアンネ　秋元伸介②６５歳③２０２５年３月２０日④名古屋カテドラル布池教会⑤布池教会で主に土日のミサなどでの典礼奉仕、結婚準備講座、堅信準備講座、中高生会顧問など。週日は名古屋教区本部事務局にて教区宣教司牧評議会事務局長などの役務があります。⑥「助祭」(英語Deacon(ディーコン))はギリシャ語の「διάκονος(ディアコノス)」に由来し、意味は「召使い」「奉仕者」です。「召使い」はカナの婚宴でのイエスの奇跡の際に登場します。「この人（イエス）が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と「召使い」に言った母マリアの言葉に従って、努めていきたいと思います。

回勅 人間の偉大さ AIの時代における人格の擁護

要約 第4回

5月25日に発表された教皇レオ14世の初の回勅『人間の偉大さ―AI の時代における人格の擁護』（マニフィカ・ウマニタス）各章の要約を紹介する 5 回連載。回勅の公式訳は 9月末、カトリック中央協議会から上記タイトルの書籍として発行されました。要約の原文と図版は、バチカンの総合的人間開発省が公開したものをカトリックジャパンニュースが訳したものですが、書籍発行を受け、今回から引用部分等に公式訳を取り入れています。

第４章 変化の中で人間を保護する 真理、労働、自由

回勅の第４章は、デジタルテクノロジーによる社会・経済の在り方の変化が、個人の生き方と社会生活に及ぼす影響を考察しています。その際、人間性を守っていく上で、今日、特に懸念される三つの主な領域があるとして、真理、労働、自由を挙げています。

そこで示されるのは、人工知能やデジタルテクノロジーが単に道具に関係するだけでなく、次第に人の行動様式や人間関係、そして社会的共存の仕組みをも形作るものになっていくということです。

真　理

守るべき人間性の特徴として、最初に取り上げられるのは真理です。民主主義社会において不可欠な共通財として認識されているものです。

デジタルテクノロジーによってつくり出される環境世界では、操作された情報や改ざんされた画像、偏った言説が拡散されることで、真実と虚偽の境界が曖昧になる危険性があります。

このことに関して回勅が注目するのは、真実の情報は、中央集権的な、また自動化された管理から生まれるものではなく、信頼関係や責任を共有する実践から生まれるということです。「公共的コミュニケーションの質は社会的信頼性に直接依存し、またそれに影響を与えるからです」（１３２）。

真理は常にもろさを兼ね備えています。だからこそ、批判精神を養う教育と、責任ある技術使用を通じて守られなければならないのです。

労　働

人間性を特徴づける第二のものは労働です。労働は、人間の尊厳の基礎をなすもので、人が社会生活に参加するための通常手段であると述べられています。

機械やシステムが自動で処理を進める仕組み（オートメーション）や人工知能は、労働の領域を実効的に変える手段を提供しますが、同時に、それらは不安定さや排除を生み出すという重大なリスクをも伴います。

回勅は、そこで、開発というモデルに対して警鐘を鳴らします。

「ＡＩは、日常作業を引き受けることによって生産性を向上させると約束しながらも、機械が労働者を支援するように設計されるのでなく、しばしば、労働者が機械の速度と要求に順応することを強いられます」（１５０）。

効率が支配的な基準になると、労働は、人間的な価値や人間に関係するものの価値を失うリスクを伴うようになるのです。

自　由

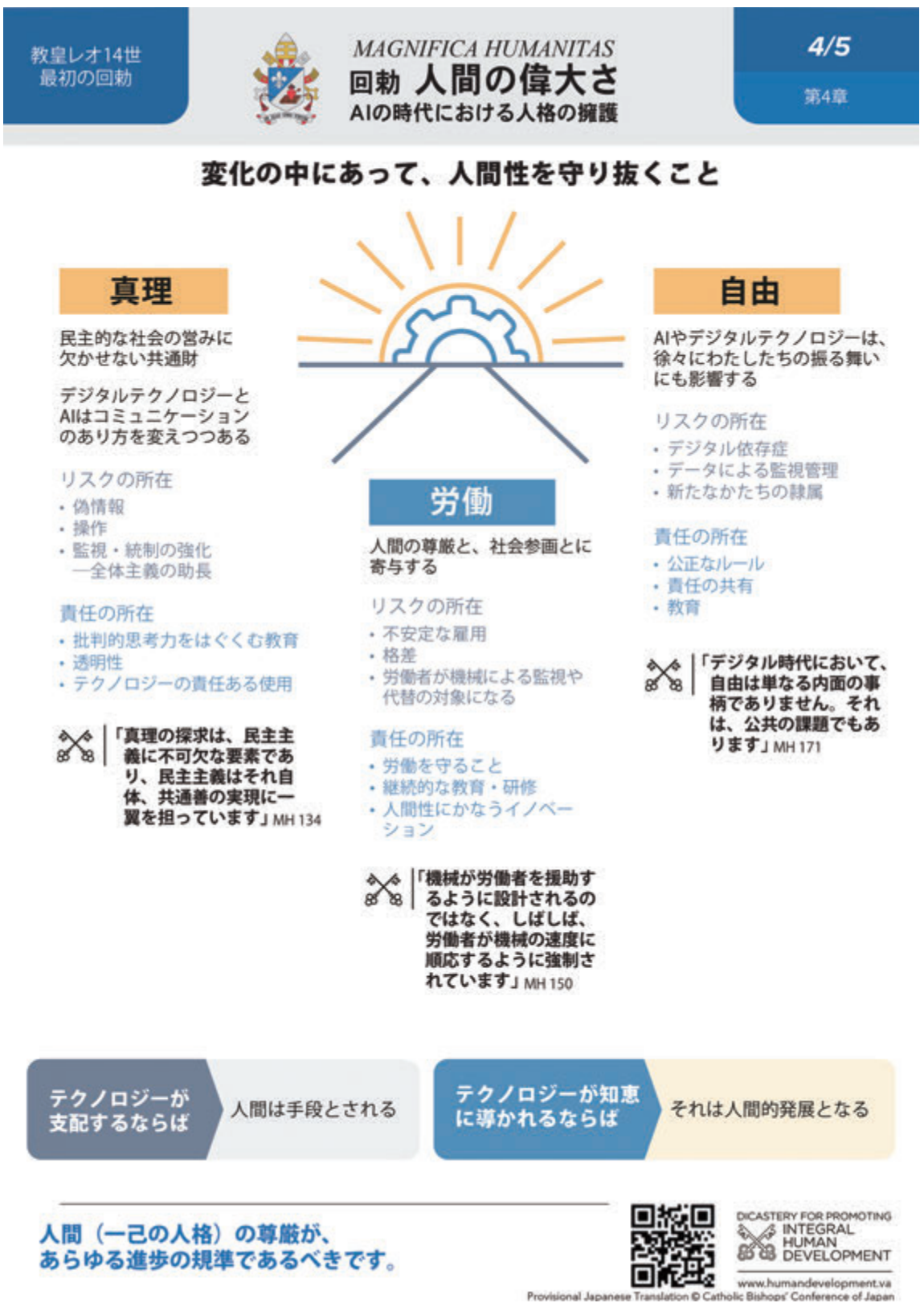
最後に、回勅は、人間性を特徴づける自由を取り上げます。自由は、今、デジタル依存や大量データ収集に基づく、新しい形態の社会統制によって脅かされています。テクノロジーは、目に見えない仕方で、人の選択や行動を左右し、真に自由な意思決定の余地を狭めてしまいかねません。

このような理由から、回勅は、はっきりと「デジタル時代における自由は、単なる内面的なことがらではなく、公共の問題でもあります」（171）と言います。自由は、公正なルールと責任の共有、そして教育を必要とするのです。

共同の取り組みへ

これら三つの特徴（真理、労働、自由）は、デジタルテクノロジーによる社会・経済の在り方の変化が中立的なものでないことを示し、本当に人間らしい生活を可能にする条件である真理、ふさわしい労働、そして真の自由を守るためには、共同の取り組みが必要であることを示しています。

（第５章〈最終回〉は次号掲載予定）



主日の福音解説

１１月１日（諸聖人）
マタイ ５・１－１２ａ

神さまの手

諸聖人の祭日には毎年、マタイ福音書の真福八端（しんぷくはったん）が朗読される。イエスは八つの宣言を、いずれも「幸い（＝マカリオイ）」という言葉で始められる。ギリシャ語としては他の語順の可能性もあるのだろうが、述語を文頭に置いて繰り返すことで、「貧しい」「悲しむ」という人間の姿より先に、「幸い」という福音がまず響く構造になっている。

それにしても、心の貧しい人、悲しむ人、迫害される人が、どうして幸いなのだろうか。私たちには、近くで泣いている人に「あなたは幸いだ」などと到底言えるはずがない。苦しみを祝福として説明すれば、福音が新たな傷をつくりかねない。しかし、この言葉を語ったのは誰であったろう。イエスは安全な場所から人々を眺めておられたのではなかった。飼い葉おけに寝かされ、十字架上で大きな叫び声を上げ、死を経て復活されたのである。だからこそ、この「幸い」という言葉を真実なものとしているのは、苦しむ人の理解や信仰の強さではなく、イエスご自身なのである。

それ故、イエスは泣く人に「もう泣くな」とも、「強くなれ」とも言われない。ただ、「悲しむ人々は幸いである。その人たちは慰められる」と約束される。「慰められる」「満たされる」「憐（あわ）れみを受ける」。聖書学で「神的受動態」と呼ばれるこれらの受け身の背後では、神ご自身が働いておられる。慰め、満たし、憐れんでくださるのは神である。従って、これは人間に何かを成し遂げよと迫る言葉ではない。私たちのために神が働いてくださるという福音なのである。

人生には築いてきたものが突然崩れ、大切な人や場所、思い描いていた未来さえ失われる時がある。その苦しみに、私たちは安易に「きっと意味がある」とは言えない。神の子が人となられたのは、苦しみの理由を説明するためではなく、人間の苦しみのただ中にも神がおられることを示すためであった。



ところで、八つの幸いの最初と最後は、「天の国はその人たちのものである」という同じ言葉で囲まれている。これはマタイがしばしば用いる文学的な「包摂（ほうせつ）」である。日本語訳では見えにくいが、間の六つの約束が未来形であるのに対し（直訳すれば、「慰められるだろう」「満たされるだろう」などとなる）、この二つだけはギリシャ語の直説法現在形で書かれている。最初と最後に置かれた二つの現在形が、六つの未来の約束を囲んでいる。泣き、飢え、渇く人は、いつの日か天の国に迎えられるだけではない。涙の谷で慰めの完成を待つ今も、一瞬たりとも神の支えの外に置かれてはいない。二つの現在形は、あたかも神の両手のように、その人の「今」を両側から包んでいるのである。

最後に、イエスの言葉は「その人たち」から「あなたがた」へと変わる。これは遠い昔の聖人たちだけに向けられた言葉ではない。今ここで希望を探し続ける一人一人への呼びかけなのである。人には、涙が止まらず、一歩を踏み出す力さえ見いだせない時がある。その時、主はその人の傍らに留まり、共に重荷を担ってくださる。私たちが諦め、疲れ果て、その御手（みて）を離してしまいそうな時にも、神の両手は私たちの「今」を包み、決して離さないのである。

（熊川幸徳（くまがわゆきのり）神父／サン・スルピス司祭会）

１１月８日（年間第３２主日）
マタイ ２５・１－１３

油を用意できるのは今

今日の福音には１０人のおとめが登場します。婚宴の時に、花嫁の友人として共に花婿を待ち、その場をともし火で照らして明るくする役目を持っていたおとめたちです。その１０人のうち、５人は賢くて、後の５人は愚かなおとめとして描かれています。特に愚かなおとめたちと花婿のことを描くことで、イエス様はあることのたとえを語っていきます。

１０人のおとめたちはそれぞれのともし火を用意して、花婿が来るのを待っていました。賢いおとめたちと愚かなおとめたちの違いは油を用意していたかどうかだけです。花婿が遅れると、賢いおとめたちも、愚かなおとめたちも皆、眠り込んでしまいました。賢いおとめだからといって、ともし火が消えないように目覚めて火を守っていたわけでもありません。しかし、花婿が来た時、状況は完全に変わります。福音には、愚かなおとめたちのともし火が消えそうになったと書いてありますが、実に賢いおとめたちの状況も一緒でした。それで、油を分けてやることができなかったのです。愚かなおとめたちは何とかして火を守らなければならなかったので、結局油を買いに行くこと、すなわち、その場を離れることにしたのです。



その間、花婿が来て婚宴は始まり、戸が閉められます。愚かなおとめたちが帰ってきましたが、花婿は知らないふりをします。このたとえ話で花婿がイエス様を意味するのであれば、そのような姿はこれまで私たちが知っていた憐（あわ）れみ深いイエス様の姿とは全然違います。愚かなおとめたちに欠けていたのは、油を用意することだけですが、それだけで知らないふりをするなんてひどいと思わないでしょうか。

ここで私たちは、特に死者の月に当たって、重要なことに気付きます。今はイエス様が憐れみ深い御心（みこころ）で私たちの過ちをゆるしてくださいますが、主が再び来られるその時には、主の憐れみを求めることができないということです。主の憐れみを求めることができなくなるのは、主が来られた時、その場を離れていたからで、その理由は常に油を用意していないからです。

今、煉獄（れんごく）にいる多くの霊魂がそのような状況に置かれていますが、幸いにも私たちにはまだ油を用意することができる時間がゆるされていますし、教会が定めたとおりに彼らのためにも油を用意することができます。今がちょうどその時です。私たちが多くの聖人の取り次ぎに支えられて、あらゆる試練に打ち勝つように、私たちがささげる死者のための祈りは彼らにとって大きな支えとなり、また、私たちが受ける免償も彼らの助けになるのです。

（ダニエル・キム・ドンウク〈金桐旭〉神父／韓国殉教福者聖職修道会）

主日の福音解説

１１月１５日(年間第３３主日)
マタイ ２５・１４－３０
または ２５・１４－１５、１９－２１
貧しい人のための世界祈願日

徴税人のマタイとイエス様

今日は**「貧しい人のための世界祈願日」**です。

今日の福音のたとえ話で、主人に従い、僕(しもべ)たちはその富（財産）を増やしていきました。しかし、最後の一人は主人に従うことなく、外の暗闇へ追い出されます。なぜ、この福音には最後の一人の話があるのでしょうか？

「不幸なことに現在、少数の特権階級の手によって、これ見よがしに富がますます蓄積されており、そのために違法行為や、人間の尊厳を傷つける搾取が頻繁に行われ、貧困が全世界のほとんどの社会で驚くほど広がっています」（第１回「貧しい人のための世界祈願日」２０１７年　教皇フランシスコのメッセージ）

際限なく富を増やすことは、貧しい人々から搾取し続けることです。

「貧しさは、薄汚い利益のために搾取され、権力と金銭が支配する邪悪な論理によって踏みにじられた男女や子どもたちの顔をしています」（同メッセージ）



蒔(ま)かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることで、人々は搾取され、貧しくなり、踏みにじられた人々の叫びは増しています。マタイの徴税の仕事は、貧しい人々から刈り取ることで人々を踏みにじり、さらにかき集めることでした。イエス様はマタイを見つけて声をかけます。「わたしの仲間になりませんか？」と（マタイ９・９参照）。

マタイが従ったイエス様は、人を貧しくさせること、人間が人間を支配し、搾取し奪い取ることを決しておゆるしになられませんでした。

「貧しさは、苦しみ、疎外、抑圧、暴力、拷問、監禁、戦争、自由と尊厳の剥奪、無関心、無学と非識字、衛生面での緊急事態、雇用不足、人身売買、奴隷制、亡命、貧困、強制移住」（同メッセージ）

今日の福音の後、２６章からイエス様はご自身が引き渡されることを宣言され、実際にこの世の権力者たちはイエス様を殺す相談を始めます。

「あなたの口を開いて弁護せよ　ものを言えない人を　犠牲になっている人の訴えを。
あなたの口を開いて正しく裁け　貧しく乏しい人の訴えを」

（箴言３１・８～９）

イエス様が十字架にかけられるのは主人が追放を命じた外の暗闇、エルサレムの街の城壁の外です。そこでイエス様は嘆き、歯ぎしりし、そのいのちをわたしたちのためにおささげになられました。

「罪のないキリストが十字架につけられ、貧しく、裸で、すべてをはぎ取られた人間として、あふれるほどの神の愛を示した瞬間です。御父に完全に身をゆだねるイエスの姿勢は、イエスの完全な貧しさを表す…」（同メッセージ）

イエス様の嘆きはものを言えない人々の声、
イエス様のいのちは貧しい人々の希望。

（寺浜亮司神父／福岡教区）

１１月２２日(王であるキリスト)
マタイ ２５・３１－４６
世界青年の日

最も小さい者

マタイ福音書２５章には終末をテーマにした三つのたとえが語られています。その三つ目であり、２５章全体をまとめているのが本日のマタイ福音書の箇所です。

終末には人の子が到来し、栄光の座に着くと語られています。王として栄光の座に着いて、そこにすべての国の民が集められるとありますから、この王というのは全人類の支配者である王ということになります。王は裁きを行いますが、それは何らかの罰を与えるということではなく、分けられるということが中心になっています。羊飼いが羊と山羊を分けるように民は裁かれます。

王は右側の人たちに「わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい」と歓迎しています。その理由は「飢えていたとき、のどが渇いていたとき、旅をしていたとき、裸のとき、病気のとき、牢にいたとき」に手を差し伸べてくれたからです。ところが、彼らは王に対してそのようなことをした覚えはないと答えます。すると王は直接にしてくれたわけではないが、わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしてくれたのは、わたしにしてくれたのと同じなのだと説明します。彼らは目の前の苦しむ人を見て手を差し伸べずにはいられなかったのです。それは特別なことではなく、彼らにとっては当たり前の行為でした。



左側にいる人たちに対して王は「呪われた者ども」と呼んで、「わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ」と厳しい言葉を浴びせています。その理由は「飢えていたとき、のどが渇いていたとき、旅をしていたとき、裸のとき、病気のとき、牢にいたとき」に手を差し伸べてくれなかったからです。彼らは驚いてそのような覚えはないと答えます。王はこの最も小さい者の一人にしてくれなかったのは、わたしにしてくれなかったのと同じなのだと説明します。彼らは目の前の苦しむ人に対して無関心でした。ですから手を差し伸べることもなかったのです。

たとえに出てくる「最も小さい者」とは社会の中でつらい思い、肩身の狭い思いをしながら生きている人のことです。そのような人たちに憐(あわ)れみの心をもって手を差し伸べる生き方をするのか、それとも無関心に生きていくのか、終末を待つまでもなく裁きはもうすでに始まっていると、今日の福音は告げています。

（立花昌和神父／東京教区）

これまで福音解説をご担当くださった４人の神父様は、今回までとなります。２０２５年４月からご執筆いただき、ありがとうございました。１２月号からは新しい神父様方がご担当くださいます。
※なお１１月第５週（待降節第１主日）は、川邨(かわむら)裕明神父様（大阪高松教区）にご担当いただきました（次ページ）。

主日の福音解説

１１月２９日（待降節第１主日）
マルコ １３・３３－３７

目を覚ましている

今日は待降節第Ⅰ主日です。そして、新しい典礼暦年、Ｂ年の始まりでもあります。教会は、新しい一年をクリスマスの準備から始めます。私たちも気持ちを新たにして、信仰の歩みを始めていきたいと思います。

その準備の第一のテーマが、今日の福音にある「気をつけて、目を覚ましていなさい」というイエスの言葉です。

それでは、私たちは何に気をつけて、目を覚ましている必要があるのでしょうか。



クリスマスを迎えるということから考えれば、それは主の降誕を目覚めて待つということです。幼子イエスがお生まれになる時を、喜びをもって待つのです。

しかし今日の福音には、もう一つの「待つ」という意味があります。家の主人が旅に出て、僕（しもべ）たちに仕事を割り当て、門番には「目を覚ましていなさい」と命じます。そして、主人は思いがけない時に帰って来るかもしれない、とイエスは言われます。

これは、主イエスの再臨、つまり終わりの時に主が再び来られ、救いを完成されることをも示しています。

幼子イエスのお生まれになる時を待つことと、終わりの日に主が来られるのを待つこと。一見すると違うようですが、共通しているのは、**神の到来を待ち望む**ということです。

ここで大切なのは、神の到来は恐ろしい時ではなく、喜びの時だということです。初めて子どもを迎える家庭では、喜びと同時に少しの不安を抱きながら、母親、父親、祖父母、それぞれが自分に与えられた役割を果たして準備をします。今日の福音でも、主人は僕たち一人一人に仕事を割り当てています。そして門番には、主人の帰りを見守る役割を託しています。

私たちも同じです。神は私たち一人一人に、それぞれの役割を与えておられます。家庭で、地域で、仕事の場で、そして教会で、自分に託された務めがあります。「目を覚ましている」とは、ただ眠らずに待っていることではありません。自分に与えられた務めを誠実に果たしながら、神が来られる時を見逃さないことです。

主は遠い未来だけに来られるのではありません。今日、私たちが出会う人の中に、目の前にいて悩んでいる人の中に、教会を訪ねて来る人の中に、主が来られるかもしれません。

教会は、これまで主の弟子たちから受け継いできた「門番」の役割を、今も担っています。主が来られることを待つだけでなく、主が来られることを人々に知らせ、誰もが主を迎えることのできる門を開いておく使命です。この待降節、私たちもその役割を積極的に担っていきましょう。「主よ、あなたが来られることを私は待っています。そして、私に何をするよう望んでおられますか」、そう問いながら、自分に与えられた務めを果たしていきたいと思います。

「気をつけて、目を覚ましていなさい」。この主の言葉を心に刻み、喜びをもって主を待ちながら、新しい一年の信仰の歩みを始めてまいりましょう。

（川邨裕明神父（かわむら）／大阪高松教区　カットは全て高崎紀子）

文　化

短歌　春日いづみ選

毎月5日まで（必着）、はがきに3首以内。1人1枚を厳守。氏名に振り仮名を明記。送り先は俳句欄左下に記載。下記ＱＲコードからオンライン投稿も可

戦死者の母たる己（おのれ）描きたるケーテの眼（まなこ）われを貫く　東京　植竹　雄太

【評】ケーテ・コルビッツはドイツの画家、版画家、彫刻家。第一次世界大戦で息子を亡くし、母としての悲嘆を作品にしています。描かれたケーテの自身の眼にくぎ付けになった作者の衝撃が伝わります。

被爆者の歌友が万感込めて読む「平和の誓い」響き渡れり　長崎　中村　達見
鳩の背に平和が重い八月の天の揺らぎのような羽音よ　東京　稲山　博司
文鳥がこの家に来て囀ればわれはその声聴く者となる　熊本　矢澤　麻子
主を求め拇指一本で聖書めくりパソコンたたく召さるる日まで　枚方　宮永　久人
廃屋のあぢさゐは火を呼ぶごとく枯れ果てにけり酷暑日つづく　熊本　村田　弘子
徒競走人型ＡＩ走り抜くころげて発火す天国あるや　横浜　菊地八重子
草を引く間をわが置きし鍵の束カラスが下げて鳴きわたり行く　横浜　森山美智子
遥かなる宣教師の地に地震あれば故郷として祈り重ねむ　京都　杉本　友子
足さすり杳い眼をして母の言う最後に走った時はいつかと　秋田　畑山真理子

俳句　稲畑廣太郎選

毎月5日まで（必着）、はがきに5句以内。氏名に振り仮名を明記。送り先は左下に記載。下記ＱＲコードからオンライン投稿も可。

◎満目の青田の道にそよぐ風　福岡　三谷　淑美
【評】青田の景が、正に日本の原風景である
◎炎天や被爆マリアの黙（もだ）の声　西宮　井田　國敬
【評】被爆したマリア像の声なき声を聞く作者
秋に入る鐘の音沈む茜空　川崎　守田　光代
蜩や暮れゆく空へ時刻む　大阪　大町　久美
六甲の万緑ロープウェイの窓　大分　水嶋　茂士
指揮の手の聖歌導く堂の秋　豊中　岩田　都世
闇涼し星吊り上げし重機の秀　神戸　西村みどり
夏帽子手話で始まる甲子園　宇治　椎原　園美
月涼し紀伊の山々闇深く　和泉　中里　君子
百歳の歌集読みをり原爆忌　仙台　斎藤　紀歩
秋涼しこの世の未練落としゆく　東京　岩村　恵子
撫子の風と戯れたき花弁　神戸　涌羅　由美
立秋や教師はいつもペン握る　大阪　上本　白水
野分去り騒き戻るや今朝の駅　西宮　井田　君枝
青嵐風の挽歌をかき鳴らす　大牟田　岩永美智子
真夜中に鉛筆削る極暑かな　芦屋　平田ひろみ
秋あかねマリアの肩に止まりをり　三原　村田　和男
こぼれ種大地抱くや牽牛花　秦野　小泉早由美
秋の川命育む水嵩に　選者吟

投稿規定　短歌・俳句共に、未発表の自作をはがきまたはオンラインでお送りください。1回につき短歌は1人3首まで、俳句は5句まで。お名前に振り仮名を付けてください。はがきの送り先は、〒135―8585　東京都江東区潮見2の10の10　カトリック中央協議会広報部広報課「短歌係」または「俳句係」。締め切りは毎月5日（必着）です。作品は選者の先生によって添削されることがあります。

訃 報

池田雄一神父（大阪高松教区）９月１１日、兵庫県明石市内の病院で弓部大動脈瘤切迫破裂のため逝去。85歳。1941年兵庫県生まれ。苦しみの中にある人々を助ける仕事に携わりたいとの思いから司祭への道を志した。



71年司祭叙階。以後、堺、津守（当時／以上大阪）、住吉、園田、垂水（以上兵庫）などの各小教区で司牧。暁光会大阪支部付として生活困窮者支援活動に携わった。79年から86年まで東京カトリック神学院（当時）の養成者として奉仕。三重県のアガペの家では、障がいや病気などによって、苦しみの中にある人々と共に農業をしながら生活した。阪神・淡路大震災に際しては、被災者支援に携わり、苦しむ人々に寄り添う司祭として働いた。東日本大震災の際にも現地に入り、カリタス大船渡ベース（岩手）の初代ベース長を務めるとともに、仙台教区の築館教会（宮城）の司牧にも協力。その後大阪高松教区に戻り、アガペの家に居住しながら、2014年から阿倍野ブロック津守分教会の協力司祭。22年からはサービス付き高齢者向け住宅ドムスガラシア（兵庫）に居を移した。自身の戦争体験から、戦争や震災の記憶を決して風化させてはならないとの思いを強く持ち、苦しみや悲しみを経験した人々の思いを伝え、その記憶を次の世代へと受け継いでいくことを大切にしていた。

平田政信神父（名古屋教区）９月25日、名古屋市内の病院で咽頭がんのため逝去。74歳。1952年福岡県生まれ。81年司祭叙階。同年豊橋助任。84年布池助任。87年主税町助任。98年同主任。2001年守山主任。13年小牧主任。18年小牧・守山主任兼任。19年小牧主任ならびに守山教会共同宣教司牧チーム。21年押切・小牧・守山教会共同宣教司牧チーム。26年４月から押切主任。1993年から2008年までは主税町聖母幼稚園（当時）園長、10年から25年までは同教区本部事務局長も務めた（以上愛知）。小教区司牧では、ミサの時に「パウロさん」「ペトロさん」などの言葉を使い、親しみのある分かりやすい説教をした。お泊り会やサマーキャンプなどでも、楽しい教会活動で子どもたちの信仰を育ててきた。また例年８月に行われた教区の広島巡礼では、長きにわたってマイクロバスの運転手を務め、中高生の信仰と平和に対する関心を育てた。外国籍信徒との関わりを大切にし、特に多くのベトナムの青年たちから親しまれ、慕われていた。



告知板

■北海道

►天使大学・北海道科学大学連携講座「いのちみつめて」 YouTube配信中（12月まで配信／期間中何度でも視聴可）。内容＝「人生100年時代をウェルビーイングに生きる」（吉田礼維子／天使大学看護栄養学部看護学科教授）、「『おいしく食べる』を続けるために～物価高、気候変動が大きいなかでわたしたちにできることは～」（志賀一希／同栄養学科准教授）、「周産期のメンタルヘルス」（森川由紀／天使大学大学院助産研究科准教授）、「体内時計が健康を決める？～知っておきたい病気との深い関係～」（髙栗郷／北海道科学大学薬学部薬学科准教授）、「見逃さないで！肝臓からの静かなSOS」（印藤智一／同大学保健医療学部臨床工学科教授）。下記QRコードから要申し込み。（配信期間中も申し込み可）。無料。電話011-741-1051 ✉c-koza@tenshi.ac.jp 天使大学公開講座担当学務課

■宮 城

►故・加藤一二三客員教授を偲ぶ会 11月22日（日）午後１時30分～４時30分、仙台白百合女子大学講堂。追悼ミサ（司式＝エドガル・ガクタン司教〈仙台教区〉）と追悼講演（テーマ「ほがらか脳のすすめ：ひふみんを偲んで」、講師＝茂木健一郎〈東京大学大学院特任教授〉）。下記QRコードから11月21日（土）までに要申し込み。先着500人。無料。電話022-372-3254 仙台白百合女子大学総務課

■東 京

►生活困窮者支援フェスタ 11月14日（土）午前11時～午後５時、東京カテドラル関口教会（関口会館・ケルンホール・カテドラル地下聖堂）。炊き出し調理体験（先着40人）と試食会、支援団体の活動紹介・物品販売会、講演会「経済のグローバル化と貧困・格差―貧困とどう関わればよいのか」（講師＝下川雅嗣神父〈イエズス会／上智大学総合グローバル学部教授〉）、貧しい人のための世界祈願日ミサ（主司式＝小池亮太神父〈東京教区／カリタス東京常任委員長〉）。下記ＱＲコードから要申し込み。参加無料。電話03-6420-0606、080-8259-0993、✉info@caritastokyo.jp カリタス東京事務局

►初金聖歌隊 30周年コンサート 11月14日（土）午後２時～、麹町教会主聖堂。指揮＝大内葉子、オルガン＝浅尾直子、チェロ＝粟飯原亮太。プログラム＝Misa Criolla/Ramirezより、チェロ・オルガン独奏、Requiem/Faureよりほか。詳細は下記QRコードから。無料。電話03-3263-4584 麹町教会

►写教の会（その日の福音を毛筆で写し、心を主に向ける集い） 11月15日（日）午後４時30分～５時50分、イエズス会岐部ホール309号室。主宰＝高橋登志子修道女（聖心会）。持参する物＝筆ペン、文鎮、下敷き30×50㌢（フェルトまたは新聞紙）。11月12日（木）までに要参加申し込み。500円（自由献金）。✉phostere@gmail.com 古賀

►青年の祈りのひととき 11月27日（金）午後６時30分～、シャルトル聖パウロ修道女会・九段修道院。祈り、分かち合い、茶話会。対象＝18歳（高校生は除く）～35歳でカトリックの祈りや信仰に心が向いている人（宗教不問）。参加司祭＝小田武直神父（東京教区）。下記QRコードから要申し込み。電話080-8259-0993 東京教区教皇庁宣教事業（MISSIO TOKYO）田所

お知らせ 行事告知投稿フォーム締め切り日変更

カトリックジャパンニュースウェブサイトの「お知らせ一行事告知」に掲載する2027年1月の行事告知から、投稿締め切り日が毎月５日に変更になります。

2026年12月の行事告知は11月10日（火）、27年１月の行事告知は12月５日（土）が締め切りとなり、以降、毎月５日が締め切りとなりますのでご注意ください。

なお、掲載の時期等には変更なく、その月の末に翌月分を同サイトで配信し、その一部を本紙に掲載します。投稿フォームは右記QRコードから。

番 組

ラジオ心のともしび

（朗読・坪井木の実）

11月の放送日と執筆者

２日（月）古橋昌尚・３日（火）竹内修一・４日（水）山本久美子・５日（木）許書寧・６日（金）森田直樹・７日（土）コリーン・ダルトン・９日（月）赤井悠蔵・10日（火）古川利雅・11日（水）岸本景子・12日（木）ビスカルド篤子・13日（金）中島貴幸・14日（土）松本准平・16日（月）岡野絵里子・17日（火）下窄優美・18日（水）末盛千枝子・19日（木）こいずみゆり・20日（金）松浦信行・21日（土）服部剛・23日（月）三宮麻由子・24日（火）山本ふみり・25日（水）崔友本枝・26日（木）萩原久美子・27日（金）片柳弘史・28日（土）今井美沙子・30日（月）堀妙子（以上テーマ「それぞれのつとめ」）。ウェブサイト（下記ＱＲコードでアクセス可）では24時間視聴可能。心のともしび、詳細は電話075-211-9341。

きょうをささげる（教皇による祈りの世界ネットワーク）11月

【教皇の意向：富のふさわしい活用】

富がふさわしい方法で活用され、利己主義への誘いに屈することなく、常に共通善や貧しい人々との連帯が推進されますように。

【日本の教会の意向：日本と韓国の教会】

日本と韓国の教会のために祈ります。同じキリスト者として手を携え、さまざまな課題に取り組みながら、福音を証ししていくことができますように。

私たちが生きるために、富や財産は必要なものです。それ自体が悪なのではなく、問題は、富を「自分のもの」とし、より多く持つことに幸せを求めるときに生じます。イエスは「あなたの富のあるところに、あなたの心もある」（マタイ6・21）と教えました。富は、私たちの心を利己主義へと閉ざすこともあれば、他者への愛と分かち合いへ開くものにもなります。経済活動の目的は、利益を最大化することだけではなく、働く人の尊厳を守り、貧しい人を取り残さず、全ての人が人間らしく生きられる社会を築くことです。私たちに託された富が誰かの犠牲の上に蓄えられるものではなく、共に生きる喜びを生み出すものとなるよう祈りましょう。

＊

日本と韓国は、海を隔てた隣国であり、両国の教会も長年にわたり交流を重ね、過去の歴史を見つめながら、和解と平和のためにともに歩んできました。歴史や文化、言葉の違いを超えて私たちを一つにするのは、同じキリストへの信仰です。その歩みに新しい希望を与えているのが、2027年８月に開催されるワールド・ユース・デー（WYD）ソウル大会です。隣人である両国の教会が、互いに耳を傾け、理解を深め、支え合いながら、東アジアの平和と和解のしるしとなることができますように。そしてWYDソウル大会に向かう若者たちの出会いを通して、新しい友情が生まれ、喜びと希望に満ちた福音が、共に証しされていくように祈りましょう。